

# 樺太アイヌの口承文芸における語りの構造—浅井タケの トウイタハ「カラスと娘」の場合

大喜多 紀明

252-0311 神奈川県相模原市南区東林間4-25-3-B

## Structure of the Narration in an Oral Literature of Sakhalin Ainu—In a Case of “etuhka newa monimahpo”

OHGITA Noriaki

4-25-3-B Higashi-rinkan, Minami-ku, Sagami-hara, Kanagawa 252-0311, Japan. ✉[sobkitan@yahoo.co.jp](mailto:sobkitan@yahoo.co.jp)

### はじめに

アイヌ民族は、潤沢な口承文芸を伝承してきた。このことは、アイヌ文化の特徴の一つが無文字文化であることに一因している。アイヌ口承文芸についての研究は、金田一らによる萌芽期（金田一・知里1936）から近年に至るまで（久保寺1977；藤村1988）、多くの研究者の手によって研究されてきた。

ところで、アイヌ語には、かつては、北海道方言以外に、千島方言（千島アイヌ語）や樺太方言（樺太アイヌ語）があった。しかし、千島方言は既に消滅言語となっている（村崎1963）。アイヌ語北海道方言についても、それを母語とする人たちは少なく、現在、消滅危惧言語として指定されている（上野2011）。本稿で取り上げる樺太方言の場合も、最後の話者とされる浅井タケ（1902-94）の死によって消滅言語となったとされる（村崎2012）。

北海道アイヌにおける言語や口頭文芸の資料については、比較的多く採取されてきた（例えば田村1988）のだが、その一方、樺太および千島アイヌの資料については、北海道のそれに比べて遥かに絶対的な量が少なく、かつ、先行研究も少ない。筆者は、既に採録され、資料化されている樺太アイヌの口承に焦点を絞り、それらに対して、修辭論的な視点からの調査を行った（大喜多2013）。

北海道アイヌの場合は、居住地が主に、いわゆる和人のそれと隣接している。それに対して、樺太アイヌの場合は、和人よりもむしろ、ニヅフやウィルタに隣接していた（丹菊2011）。居住地のみを考えると、樺太アイヌは、和人よりもニヅフやウィルタの影響を受けやすい地理的な環境にある。口頭文芸の分野に限っても、樺太アイヌのそれに対して北方諸民族の影響を見出した知見がある（丹菊2012）。筆者は、北海道アイヌと樺太アイヌの口承文芸における関係を調査している。本稿の目的は、北海道アイヌと樺太アイヌの口承との構造的な共通点についての一知見を、修辭論的な視点から提供することにある。

大喜多（2013）では、『浅井タケ昔話全集I, II』（村崎恭子、浅井タケ昔話全集1, 2。アジア・アフリカ言語文化研究所、[http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki\\_gen/murasaki/asai01.html](http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki_gen/murasaki/asai01.html)。2012年1月5日閲覧）に掲載されている浅井による4編の口承テキストを題材として、それらに使用された修辭表現を調査した。その結果、4編の内の3編では、交差対句が主要な修辭技法として使用されていることが確認された。後述するように、このような交差対句の使用は、北海道アイヌではしばしば見出される特徴である。本稿は、大喜多（2013）の続編として位置付けられ、『浅井タケ昔

話全集I, II』に掲載されたテキストの中でも、大喜多(2013)で扱っていないものの内の1編をテキストとしている。また、テキストの分析においては、交差対句の使用についての調査を主軸としている。

### 交差対句について

交差対句は構文に使用される修辞技法の一種である。例えば構文中に、 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D \rightarrow D' \rightarrow C' \rightarrow B' \rightarrow A'$ のように、一対の語、句、節が複数対、同心円状に配列した形式を交差対句とする。このような修辞技法についての呼称には、例えば、キアスムスや交錯配列法などがあるのだが、本稿では大喜多(2013)と同様に、便宜上、交差対句という呼称を使用した。

### 北海道アイヌの口承における交差対句使用の事例

本節では、北海道アイヌの口承における一ジャンルであるカムイユカラ(神謡)において確認される交差対句を紹介する。このカムイユカラ「谷地の魔神が自ら歌った謡『ハリツクンナ』」は、知里幸恵の『アイヌ神謡集』(知里1978)に掲載された13編中の一編である。また、交差対句については、大喜多(2012a)の引用である。なお、テキストの行頭に付された行番と、角括弧内のアルファベットは筆者によるものである。

1. ハリツクンナ
2. [A] ある日に好いお天気なので
3. 私の谷地に眼と口とだけ
4. 出して見ていた[/A]ところが
5. [B] ずっと浜の方から人の話し声がきこえて来た。
6. 見ると、二人の若者が連れだって来た。
7. 先に来た者は勇者らしく勇者の品を
8. そなえて、神の様に美しいが
9. 後から来た者を見ると、様子の悪い
10. 顔色の悪い男で、何か話し合いながら
11. やって来たが私の谷地の側を通り
12. ちょうど私の前へ来ると、あとから来た顔色の悪い男が
13. 立ち止り立ち止り自分の鼻をおおい

14. 「おお臭い、いやな谷地、悪い谷地の前を通ったら
15. まあ汚い、何だろうこんなに臭いのは、」
16. と言った。[/B]
17. [C] 私はただ聞いたばかりだけれど自分の居るか居ないかも
18. わからぬほど腹が立った。
19. 泥の中から飛び出した。私が飛び上ると
20. 地が裂け地が破れる。牙を
21. 鳴らしながら、彼等を強く追っかけたところが
22. 先に来た者は、それと見るや
23. 魚がクルリとあとへかえる様に引っかえして顔色の悪い男の
24. わきの下をくぐりずーっと逃げてしまった。
25. 青い男を二間三間追っかけると
26. 直ぐ追いついて[/C] [D] 頭から呑んでしまった。
27. そこで今度は彼(か)の男をありったけの速力で追っかけて
28. 人間の村、大きな村の後へ着いた。[/D]
29. [E] 見るとむこうから
30. 火の老女、神の老女があかい着物、六枚の着物に
31. 帯をしめ、六枚の着物を羽織って
32. あかい杖をついて私の側へ飛んで来た。
33. 「これはこれは、お前は何しにこのアイヌ村へ
34. 来るのか、さあお帰り、さあお帰り。」
35. 言いながら、あかい杖、かねの杖をふり上げて私を
36. たたくと、杖から焰が
37. 私の上へ雨の様に降って来る。[/E]
38. [F] けれども私はちっとも構わず、[/F]
39. [G] 牙打ち鳴らしながら彼の男を
40. 追っかけると、彼の男は村の中を
41. よくまわる環の様に走って行く。[/G] [G'] そのあとを飛んで
42. 行くと、大地が裂け大地が破れる、村中は大き過ぎ
43. 妻の手を引く者、子の手を引く者、泣き叫び
44. 逃げゆくもの、煮えくりかえるようなありさ

- ま, [/G'] [F'] けれども
45. 私は少しも構わず, 土吹雪
  46. をたてる, [/F'] [E'] 火の老女神は私の側を走って来ると
  47. 大へんな焔が, 私の上に飛び交う, [/E']
  48. [D'] その中に, 彼の男は一軒の家に
  49. 飛び込むと直ぐにまた飛び出した.
  50. 見ると, 蓬の小弓に蓬の小矢をつがえて
  51. むこうから, ニコニコして, 私をねらっている.
  52. それを見て私は可笑しく思った.
  53. 「あんな小さな蓬の矢, 何で人が苦しむものか。」と
  54. 思いながら私は牙を打ち鳴らして,
  55. 頭から呑もうとしたら
  56. その時彼の男は私の首ッ玉を
  57. したたかに射た. それっきりどうしたか
  58. わからなくなってしまうた.
  59. ふと気がついて見たところが
  60. 大きな竜の耳と耳の間に私はいた.
  61. 村の人々が集って, 彼(か)の私が追っかけた若者が
  62. 大声で指図(さしず)をして, 私の屍体をみんな細かに刻み
  63. 一つ所へ運んで焼いてその灰を
  64. 山の岩の岩の後へ捨ててしまった.
  65. 今になってはじめて見ると, それは, ただの人間
  66. ただの若者だと思ったのは
  67. オキキリムイ, 神の勇者であった.
  68. 恐しい悪い神, 悪魔神, 私はそれであって
  69. 人間の村の近くにいるので, [/D']
  70. [C'] オキキリムイは村の為を思って, 私をおこらせ
  71. 自分を追いかけさせて, 蓬の矢で私を殺したので
  72. あった. それから, 先に私が呑んでしまった
  73. 青い男は, 人間だと思ったのだったが [/C']
  74. [B'] それは, オキキリムイがその放糞を人に作り,
  75. それを連れて来たのであった. [/B']

76. [A'] 私は魔神であったから今はもう
77. 地獄のおそろしい悪い国にやられたのだから
78. これからは, 人間の国には, なんの危険も
79. ない, 邪魔ものもないであろう.
80. 私は恐しい魔神であったけれども,
81. 一人の人間の計略にまけて
82. 今はもう, つまらない死方, 悪い死方をするのです.
83. と谷地の魔神が物語りました. [/A']

ここで, それぞれのアルファベットに挟まれた領域(例えば [A] と [/A]) を配列すると表1のように表現できる.

表1のように, 「ハリツクンナ」には合計7対の対応を持つ交差対句が主要な修辞技法として使用されている. 「ハリツクンナ」に確認されるような交差対句の使用は, 北海道アイヌの口頭文芸にしばしば見出される修辞的な特徴である(次節参照).

表1. 交差対句「ハリツクンナ」.

---

A 谷地に棲む龍
B 二人の若者との出会い
C 腹を立てる龍
青い男の記述
D 青い男を頭から呑み込む
→村へ
E 火の老女 杖から焔
F ちっとも構わない龍
G 彼の男を追いかける龍
男は環の様に走る
G' 男のあとを飛んでいく龍
村人は逃げ, 煮えくりかえるような様
F' 少しも構わない龍
E' 火の老女 大へんな焔
D' 彼の男を頭から呑み込もうとする
→黄泉へ
C' 龍を怒らせたのは計略だった
青い男の記述
B' 二人の若者の正体
A' 地獄に送られた龍

---

**表2.** 北海道アイヌ口頭資料における交差対句の先行研究.

口承文芸	
カムイユカラ (神謡)	大喜多 (2012b)
メノコユカラ (女の謡)	大喜多 (2012c)
ウウェベケレ (散文説話)	大喜多 (2012d)
口くらべ	大喜多 (2012c)
談話資料	
自然会話	大喜多 (2012c)
挨拶口上	大喜多 (2012f)

### 先行研究

交差対句を見出すことができる口承ジャンルは、前節で紹介したようなカムイユカラだけではない。表2に北海道アイヌの口頭資料に交差対句が見出される事例を紹介している文献を、口承ジャンル別に示す。

また、口承文芸のみではなく、北海道アイヌの談話資料においても、交差対句を主要な修辞技法として使用している事例がある(表2)。

以上のように、交差対句は、北海道アイヌにおいて、ジャンルを越えて使用される修辞技法であると判断できる。筆者は、交差対句の使用が、北海道アイヌの民族的な心性に起因すると解釈しており、このことは本稿における前提である。

続いて、樺太アイヌの口頭資料における事例としては、樺太アイヌの散文説話の一ジャンルであるトゥイタハにおけるものがある。樺太アイヌの場合は、「はじめに」で述べたように、北海道アイヌのそれに比べると資料の絶対量が少ない。大喜多(2013)では、村崎が収録した浅井を話者とするトゥイタハをテキストとしている。浅井のトゥイタハは、『浅井タケ昔話全集I, II』に合計54編が収

録されている。また、『浅井タケ昔話全集I, II』によると、トゥイタハにおける物語類型は、5種に分類できるとしている(表3)。

大喜多(2013)では、怪異譚、冒険譚、3人きょうだい譚の中で、それぞれ筆者が代表的であると判断した一編ずつについての分析を行った。その結果、代表的なトゥイタハには交差対句を見出すことができた。その一方で、筆者が代表的なものとしなかったトゥイタハの一編には交差対句を見出すことができなかった。以下、前稿で得られた知見を示す。

1. 浅井を話者とするトゥイタハには、修辞技法として交差対句が使用されていると判断できるものと交差対句が出現しないものがある。
2. 交差対句形式が占める領域には差異がある。

また、前稿では、怪異譚、冒険譚、3人きょうだい譚以外の類型についても、交差対句の使用について確認するべきであるとした。本稿は、このことを受けて、異類婚姻譚(高島2006)における代表的な一編として、村崎が1987年8月7日に採録した「カラスと娘 (ctuhka neewa monimahpo)」(以下「カラスと娘」とする)をテキストとしている。

### テキスト

『浅井タケ昔話全集I, II』におけるテキスト「カラスと娘」は、浅井が樺太アイヌ語で語ったものを村崎が録音し、字起こした資料である。『浅井タケ昔話全集I, II』に掲載されている他のトゥイタハと同様に、樺太アイヌ語の読みにローマ字をあてた資料と、村崎が日本語訳をした日本語による資料からなっている。本稿では、前稿と同じく、

**表3.** 樺太アイヌのトゥイタハにおける物語類型.

鳥獣草木譚	人間と同じように暮らしている動物が登場する話。カラス・白鳥・イヌ・アザラシ・カエル・シャケ・カニ・フグなど
異類婚姻譚	動物と人間の結婚、恋など、交わりの話
怪異譚	人肉を食うOYASI (お化け goblins or ogres) の話
冒険譚	嫁取り、婿取りをするために冒険をする話
3人きょうだい譚	同じ冒険が3人兄弟(姉妹)の間で繰り返される話

類型は『浅井タケ昔話全集I, II』によった。鳥獣草木譚などの名称は筆者による。

日本語訳のものをテキストとしている。また、本稿で「カラスと娘」を異類婚姻譚における代表的な一編とした理由としては、大喜多(2013)での理由と同様に、基本的には同じ類型の中で最も古い時期に収録されたものとしている。但し、1986年10月26日に録音された「フンドシをとられた話(тепа туытаһ)」(以下、「フンドシをとられた話」とする。)も、カラスの娘たちと男たちが結婚するので、異類婚姻譚である。しかし、3人の兄弟たちが物語の主人公であるので、3人きょうだい譚でもある。一方、「カラスと娘」の場合は、3人きょうだい譚とは混交していない。本稿の主旨の一つが、大喜多(2013)を敷衍し、大喜多(2013)でとりあげた怪異譚、冒険譚、3人きょうだい譚以外の類型について調査をすることであり、大喜多(2013)では「フンドシをとられた話」を3人きょうだい譚の代表的な一編として既に調査している。したがって、本稿では、異類婚姻譚としては、2番目に採録時期が古い「カラスと娘」を代表的な一編としている。なお、「カラスの娘」では、主人公の娘が、人形で男の姿をつくり、その人形や、夢に現れた男と寝ている。この夢に出てくる男の正体は、物語中には書かれていない。しかしながら、この、娘が共に寝た男は、明らかに、いわゆる普通の人間ではない。そして、娘が男の姿の人形や夢に現れた男と寝ることで子供が誕生している。このことから、筆者は「カラスと娘」を、本稿では異類婚姻譚の一種としてとりあげた。その一方で、男の姿の人形や夢に現れた男は、いわゆる普通の人間ではないものの、動物でもないようだ。このことは、「カラスと娘」が、動物との結婚生活を描くような一般的な異類婚姻譚とも異なる特徴をもつことを示している。また、「カラスと娘」は、カラスが人間のように生活をする様子が描かれているので鳥獣草木譚でもある。

### 「カラスと娘」の構造

以下、『浅井タケ昔話全集I, II』における「カラスと娘」の日本語訳テキストを引用転記する。ここで、テキスト中に付された角括弧内のアルファベットは筆者によるものである。

[A] サンヌピシ村に娘が一羽のカラスと一緒に住んでいたとき。(ふうん。M) サンヌピシ村でカラスと暮らしていたとき。小さいときから…(アイヌ語で言ってちょうだい。M) [/A] [B] 小さいときから母さんもなく父さんもなく独りぼっちで育った娘だった。それでカラスと一緒にいたとき。カラスと一緒にいて、カラスと娘と一緒にいて、おかげで孤独を慰め合っていた。[/B]

[C] 互いに寂しさを紛らわして、2人でいたが、外に出て、娘は外に出て浜辺に出て砂の上に、美しい男たちの人形を作った。

男の人形を作ってはその上に寝た。その上に寝ていたが、すぐにその美男に抱かれる夢を見た。毎晩そんな夢を見て、それから家に帰っていった。また同じように外へ出て、浜に下りて、浜辺で夢に見た男の人形を作ったとき。人形を作ってその上で寝た。寝たらその夢に見た男がやって来て抱かれる夢をまた見た。

そうしているうちにこんど、家に中を掃除してゴミを出して捨てたりしているうちにお腹が大きくなったとき。お腹が大きくなって、子どもができたとき。男の子ができたとき。かわいい男の子が生まれたとき。

それでこんどカラスが娘をうらやましがったとき。

「どうやってこんなにかわいい子が生まれたのか?」

とカラスは言ったとき。

そうしていたら外に出したゴミ、いつも家の中のゴミを出して、そのゴミを持って外に捨てたゴミ捨て場にカラスたちが集まってきたとき。カラスたちが集まってきた、腹の皮をカリカリ、腹の皮をカリカリ搔いたとき。そうやっているうちにカラスのお腹が大きくなったとき。「お腹が大きくなったから男の子が生まれるだろう。」と言ったとき。

それでこんどはカラスが、

「自分もそうやってみるよ。」と言ったとき。

そうしてから、しばらくして、こんど小さい草くずを捨てた。草くずを撒いたらカラスたちが集まってきた腹の皮をカリカリ、腹の皮をカリカリ、

と掻いたとき。

そうしているうちにこんど、そのお腹が大きくなったとき。お腹が大きくなって、だんだん大きくなって子どもができて、カラスの子どもができたとき。カラスの子どもだったから、サンヌピシ村の娘の子をうらやましがったとき。「子どもを交換しようよ」と言ったとき。

「交換しよう」ということで、娘は自分の子がなごり惜しく思ったから、水汲みに行くにも抱いて、マキとりをするにも抱いてあちこちへ連れて行って水汲みにも連れていってくる、という風にしていたとき。

こうしているうちにある日また、水汲みに出かけたところが、川へ下りていって、思い出した。子どもを忘れてきたのだった。[/C][D] 子どもを忘れてきたから、大急ぎで水汲みをして家へ戻ったらそのカラスの子がいて、娘の子どもはカラスが連れて逃げていったとき。[/D]

[E] その自分の子どもが恋しくて、泣いたのだけれどもそのカラスの子がワーワー泣いては娘に付きまったりしていたとき。うるさいからカラスの子を蹴飛ばした。すると炬尻の、庭の方へ転がっていったがまた戻ってきて、その娘のところに転がってきて、また足で蹴飛ばして投げたりしたとき。[/E]

[F] そうしているうちに今、よく考えてみると、「もう一度こうなってしまった以上、カラスの子だけ自分が育てて大きくなったら人間の子になるかも知れない」と考えたから今育てたとき。育てて育てて今大きくなったとき。[/F]

[G] 大きくなって、もうエチキーキ鳥も、鳥もとってくるようになったとき。とってくるようになったから、娘はそれを料理したり、煮たりして食べて、そうしているうちにある日また、エチキーキ鳥をとってきたから、娘は、料理して煮たとき。煮たらその上の方に脂が浮いていたとき。

カラスの子がこう言ったとき。

“nanna nanna wah  
keekara keekara wah  
keekara keekara copis”  
と言ったとき。

見ると鍋の上の方に脂が浮いていたとき。そうしているうちに今、ある日また、エチキーキ鳥を、エチキーキ鳥を、カラスの子が、またそのエチキーキ鳥を捕ってきたら、エチキーキ鳥が鳴いたとき。

“kaa kaa kaa, 'ene'oka pon 'ctuhka, kaa kaa kaa”

と鳴いたとき。[/G]

[G] それから今、話がかわって、サンヌピシ村の娘の子は、カラスが山へ連れていって、知らないところと知っているとところの間の人知れぬ山奥で、カラスの母さんが、その男の子を育てていたとき。育てていて今、育てて大きくなって今、魚捕りやマキとりをしていたとき、男は、その男の子は。

そうしているうちにある日、男は、その男の子は、鳥をとってきたとき。鳥を一羽、弓で射っては失敗し、射っては失敗し、しているとき、エチキーキ鳥がこう言ったとき。

“cihci piipi, cihci piipi, sonnoo  
'ene'an nanna, 'ene'ani  
tekucikehe ka 'aane 'aane  
'ene'oka tehkucihe ka 'aane 'aane”

と言ったとき。

そうしたらこんど、その鳥の皮がみんな裂けてしまった。

“cihci piipi cihci piipi”と音がしたとき。[/G']

[F'] そうしてこんどそれから家へ帰って、そのカラス母さんに話したとき。男の子はカラス母さんに話したとき。

「あのね、エチキーキ鳥をばくが弓で射っては失敗し、弓で射っては失敗した。その時、エチキーキ鳥が鳴いて言うには、お前の母さんは本当にこんなに手首も細い細い、手首も細い細い、頭も小さい、って言うんだよ。」

と母さんに話したとき。(咳)

こう母さんに話したら、カラス母さんはこう言ったとき。

「兄さんたちは、私が好きだから腕輪を私に使わせてくれる。だから私の手首は細くて細いんだよ。」と言ったとき。

“kemaha 'aane 'aane ka yuhpo yuhpo uta kemasinaha  
'ikoruntehci kusu, tah kusu kemaha 'aane 'aane hee.

rekutumpe 'iyekarakarahci, rekutunkaani 'ikontehci kusu, tah kusu nah 'an rekucihi 'aane 'aane hee."

とカラス母さんは話したとき、

そうしたけれども娘…、男は、

「本当は、自分の母さんじゃないんだろう。」と思って、ある日マキとりに山へ行ったら、

マキとりに山へ行ったら、男が一人、そこに立っていたとき、見るとその男は、男の子のところへ近づいてきて話しかけた。

「あのね（姉さん）、あのね兄さん、お前の母さんは人間の娘だよ。でも母さんは今カラスの子と一緒にいるから、お前は明日お前の母さんに会いに行きなさい。」

と言ったとき。[F]

[E]それから今、男は、マキとりを、マキとりをしてその男の子に背負わせていた物を自分が背負ってその家に帰ったとき、

帰ったら、本当に娘がその家において、カラスの子も一緒にいたとき、

そうしてからこんど、娘も男の子を見て、手をとって泣いて泣いてようやく泣きやんでから今、男の子も喜んで、それから今、（娘は）ご馳走を作ってその男の子に食べさせた。[E]

[D] そうしてからその男は、またその男の子も、家へ帰っていったとき、山の方へ、

カラスのところへ帰っていったとき。[D]

[C]カラスのところへ帰ったが、そのカラスは食事の仕度をしていたとき、今食事をして、その翌日、またマキとりに山へ行ったら、山へマキとりに行ってマキをとっていたら、男がまた下りてきて、マキをとったとき、

マキをとってきて、刀を出して木に引っ掛けておいた。木に引っ掛けておいて、それからその下のところにとってきたマキを積んでおいた。

（娘は）男は、その男の子と一緒に、男の子は父親についてそこへ下りてきたとき、

それでカラス母さんのところに帰ってきたらカラスは、食事を作っていたとき、食事を作っていたが、もう仕度ができた。それを男の子に食べさせて、男も食べたとき、

そうしてこんど、

「ねえ母さん、山でとったマキをそのまま置いてきたから、どうかぼくが切ったマキのところへ行って背負ってきてください。」

と言ったとき、その男の子が、

そうしてこんど、そのカラス母さんは、そのマキを背負って持ってくるために山へ行ったら、山へ行ったら本当に切ったマキがあったからそのマキを背負って帰ろうとした途端、首の上にその刀が落ちて、そのカラスの首が折れて、死んだとき、

そうしてこんど、その男の本当の息子と一緒に母さんのところへ行ったら、それで母さんのところへ行ったら、そのカラス、カラスの子はそこでマキをとったり、魚をとったりしていたとき、

それで今、男はこんどアザラシ捕り、アザラシ捕りをして、アザラシも皆で煮たとき、煮て、食べて、かかとの骨とか、食べさせたとき、'otokomponihi というのはこの骨なんだが、かかとの骨（は一人。M）それも食べさせたとき、こんどは包丁に刃を掛けたとき、

「姉さん、waawa waawa wah。」

と言ったとき、そうしたら娘が、

「兄さん兄さん、そう言いなさい。」

と言ったとき、それでカラスは男に、

「兄さん兄さんwah, waawa waawa wah。」

と言ったら、

「水を飲め。」

と男は言ったとき、「川に下りて水を飲みなさい」と言ったんだ。

（カラスの子は）骨ごと丸のみにしてしまったとき、包丁を探したけれど見つけれなくて、丸のみしてしまったから骨が喉に引っ掛かったとき、

それから、川に下りて行って水が飲みたいと言ったら、それで川に下りていったとき、水を飲もうとしゃがんだら水の中に落ちて、口の中に水が入って死んだとき。[/C]

[B]こうして今、母さんカラスも死んだ。子カラスも死んで、それから男はその娘と男の子と一緒に家へ帰った。行ったとき。[/B]

[A]こうして帰って行って3人一緒に幸せに暮らしたとき、

ソレデオワリ。[/A]

ここで、同一のアルファベットで囲われた箇所を記号にしたがって配列すると、表4のように表現できる。

Aには、この物語における一連の出来事の前、娘がカラスと一緒に生活をしてきた様子が描かれている。一方、A'には、出来事後、娘が男と息子と共に生活する様子がある。Bには、娘とカラスが慰めあっている様子がある。それに対して、B'では、カラスが殺されてしまう。

Cにおいては、娘とカラスがさみしく生活しているところからはじまり、娘は、浜辺に男の人形を作る。その後、娘は人形や夢の中の男と寝る場面となり、一人の男の子を生む。カラスはそれをうらやましく思い、どうしたら子供が生まれるのか娘に尋ねる。すると、娘は、くちばしで腹をカリカリと搔けば生まれると言う。カラスは、腹をくちばしで搔くと、カラスの腹はだんだんと大きくなり、カラスの子供が生まれる。カラスは生まれた子供が人間の子供ではないので、娘に対して子供を取り換えてほしいと頼むのだが、娘はそれ

を断る。しかし、ある時、娘は、息子を一人にして外出してしまう。一方、C'においては、カラスが息子と男と共に食事をしている場面からはじまる。その後、男はカラスをだまして殺してしまう。そして、男と息子は娘の住む家へともどる。ここでのC-C'の関係をまとめると次のようになる。

	C	C'
生活	娘とカラス	息子とカラスと男
計略	娘がカラスを騙す	男がカラスを騙す
娘と男の子	息子を置いて外出	息子が娘の元に戻る

Dでは、カラスの子供を残して、カラスが息子連れ去る場面である。一方のD'は、男が息子連れてカラスの家へ戻る場面である。Eは、息子が連れ去られた後、残されたカラスの子供がワーワーと泣く様子が書かれている。そして、E'には、男が息子を家に連れ帰り、それを見た主人公(娘)が泣いている様子がある。

表4. 交差対句「カラスと娘」。

A 娘とカラスの暮らし		
B 娘とカラスの様子		
C カラスの嫉妬と娘の言葉		
息子を置いて外出		
D 息子を連れ去るカラス		
E 息子がいなくなる		
ワーワー泣くカラスの子供		
F 人間の子供になるかもしれない		
G (1)カラスの子供が育つ		
(2)鳥を捕まえる		
(3)エチキーキ鳥の鳴き声		
G'(1)息子が育つ		
(2)鳥を捕まえられない		
(3)エチキーキ鳥の鳴き声		
F' 本当の母ではない		
E' 息子の帰還		
泣く娘		
D' カラスの家に戻る息子		
C' 男の計略と		
カラスの死		
B' カラスの死と帰宅		
A' 三人の暮らし		

	E	E'
息子	連れ去られる	帰ってくる
泣く	カラスの子供	主人公(娘)

Fでは、カラスの子供がもしかしたら人間になるかも知れないと思って、主人公(娘)がカラスの子供を育てる様子がある。それに対してF'では、息子が、自分を育てたカラスが自分の親ではないのではないかと考えている。

	F	F'
願望と疑念	カラスの子供	人間の子供
	↓	↓
	もしかしたら人間になるかもしれない(願望)	もしかしたら自分はカラスの息子ではないかもしれない(疑念)



さらに、G-G'では、次のような対応関係となっている。

	G	G'
成長する	カラスの子供	人間の子供
鳥	捕まえる	捕まえられない
鳴き声	エチキーキ鳥	エチキーキ鳥

GとG'では、カラスの子供と息子とが対比されている。カラスの子供は鳥を捕まえられるが、息子は鳥を捕まえられない。

以上のように、「カラスと娘」は、合計7対の対応を持つ交差対句によって構成されていることが確認できる。

### おわりに

前節で示したように、一連の浅井のトゥイタハの中でも異類婚姻譚の代表的一編として筆者が判断した「カラスと娘」には、合計7対の対応を持つ交差対句を主軸的な修辞技法として使用されていることがわかった。大喜多(1993)では怪異譚、冒険譚、3人きょうだい譚における各々代表的な一編を選択し、修辞論的な調査を行った。その結果、調査を行った3編は主軸的な修辞技法として交差対句を使用していることがわかった(大喜多1993)。本稿では、異類婚姻譚の内の代表的な一編を選び、そこに、交差対句の使用を確認することができた。筆者としては、引き続き、残りの鳥獣草木譚についても調査するつもりである。

本稿で得られた知見は、樺太アイヌの口承の一ジャンルであるトゥイタハにおける交差対句の使用事例である。筆者としては、北海道アイヌにおける口頭資料でしばしば確認される交差対句の使用が、北海道アイヌの民族的心性に因すると解釈している。本稿で確認された樺太アイヌでの事例は、北海道アイヌでの交差対句の使用と類似している。したがって、大喜多(2013)の知見と併せ、交差対句の使用が、両アイヌの口承における共通点であると筆者は解釈した。また、大喜多(1993)と本稿では、樺太アイヌにおける口承の一ジャン

ルであるトゥイタハ(浅井を話者とする)を調査した。今後、トゥイタハ以外のジャンルについても確認する予定である。

### 引用文献

- 上野昌之. 2011. アイヌ語の衰退と復興に関する一考察. 埼玉学園大学紀要人間学部篇 11: 211-224.
- 大喜多紀明. 2012a. アイヌ口承文芸「ハリツクンナ」と「パナンペ尻滑り」についての考察. 国語論集9: 158-166.
- 大喜多紀明. 2012b. 『アイヌ神話集』に掲載されたカムイユカラについての考察: 修辞論的視点より. 人間生活文化研究 22: 147-158.
- 大喜多紀明. 2012c. アイヌ女性叙事詩「スズメの酒盛り」についての考察: 交差対句と心意. アジア民族文化研究 11: 181-213.
- 大喜多紀明. 2012d. アイヌ民族による散文説話「母と父がその息子を和人にやって置いて来た」についての交差対句資料: 話者が口承を記憶するメカニズム. 人間生活文化研究 22: 159-170.
- 大喜多紀明. 2012e. アイヌの日常会話にみられる民俗的修辞. 比較民俗研究 27: 133-144.
- 大喜多紀明. 2012f. アイヌの挨拶表現と民俗的修辞構造. ポリグロシア 22: 157-165.
- 大喜多紀明. 2013. 樺太アイヌの「トゥイタハ」に見出せる交差対句について. 年報人類学研究 3: 169-191.
- 金田一京助・知里真志保. 1936. アイヌ語法概説. 230 pp. 岩波書店, 東京.
- 久保寺逸彦. 1977. アイヌ叙事詩神話・聖伝の研究. 790 pp. 岩波書店, 東京.
- 高島葉子. 2006. アイヌとケルトの異類婚姻譚: カムイと人の婚姻と妖精と人の婚姻. 説話・伝承学 14: 159-177.
- 田村すず子. 1988. 二風谷の昔話と歌謡・神話: 民話 1. アイヌ語音声資料 5: 4-11.
- 丹菊逸治. 2011. あるニヴフ人の戦前と戦後. 和光大学現代人間学部紀要 4: 129-143
- 丹菊逸治. 2012. サハリン島アイヌ民族の「三人きょうだい譚」の成立仮説: ニヴフ民族の「三人

- の漁師」からの影響. 口承文藝研究35: 67-76.
- 知里幸恵. 1978. アイヌ神謡集. 186 pp. 岩波書店, 東京.
- 藤村久和. 1988. 我が子を月に召される母親の物語. 北海道教育庁社会教育部文化課(編), アイヌ民話. 昭和62年度アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ. 286 pp. 北海道教育委員会, 札幌.
- 村崎恭子. 1963. 千島アイヌ語絶滅の報告. 季刊民族学研究27(4): 657-661.
- 村崎恭子. 2012. 話者の絶えた樺太アイヌ語: その終焉と再生の可能性. 社会言語科学14(2): 3-16.